

先月までの為替相場のレビューと、  
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2014/07/01

## 利上げ期待のポンド高の思惑高まる

通貨ペア	基調		ページ数
<a href="#">ユーロ/円</a>	↗	ユーロ買い根強い 予想レンジ: 137.000～142.000円	2-3
<a href="#">ユーロ/ドル</a>	↗	ドルが方向性を決める 予想レンジ: 1.34000～1.38500 ドル	4-5
<a href="#">ポンド/円</a>	↗	年初来高値更新を睨む 予想レンジ: 170.000～176.000円	6-7
<a href="#">ポンド/ドル</a>	↗	英中銀要人のスタンスに注目 予想レンジ: 1.67000～1.73000 ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

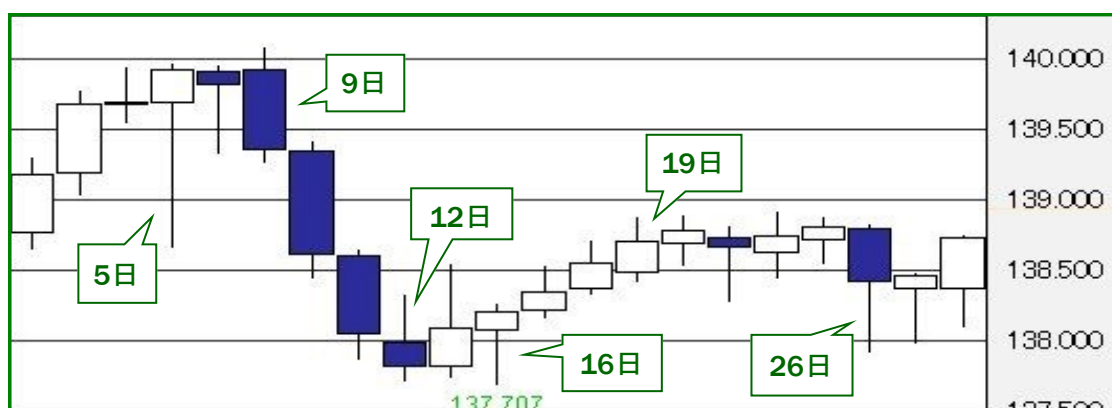
Copyright©2014 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

## ユーロ/円 6月の推移

EUR/JPY

6月のユーロ/円相場は、137.707～140.077円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは ほぼ横ばいとなった。

上旬に一時140円台を回復する場面も見られたが、欧州中銀(ECB)がマイナス金利を含む包括的な金融緩和パッケージを発表すると約4カ月ぶりの安値となる137.707円まで下落した。中旬以降は、米ドルが弱含む中でユーロにショートカバー的な買いが入り、ユーロ/円も139円付近まで値を戻したが、米ドルが弱含んだ影響から円が強含んだためユーロ/円の上値は限られた。結果的に6月の値動きは2.37円という小幅なものに留まるとともに、始値と終値がほぼ等しいという方向感に乏しい展開となった。



## 四本値

OPEN	138.780
HIGH	140.077
LOW	137.707
CLOSE	138.732

5日	ECBが主要政策金利であるリファイナンス金利を0.25%から0.15%へ引き下げると同時に、中銀預金金利(下限金利)を0.00%から-0.10%へ、上限貸出金利を0.75%から0.40%へそれぞれ引き下げた。リファイナンス金利を0.10%まで引き下げると見ていた市場は、当初ユーロ買いで反応したが、ECBが「一段の政策措置をこの後発表する」とアナウンスすると急速にユーロ売りが活発化。その後、ドラギ総裁が会見を行い「証券市場プログラム(SMP)の不胎化措置を停止」「目的を絞った長期リファイナンスオペ(LTRO)を決定」「超過準備にもマイナス金利を適用」「資産担保証券(ABS)購入に向けた準備作業を強化」などを明らかにすると138.676円まで下落した。ところが、売り一巡後は材料出尽くし感からユーロを買い戻す動きが強まり、139.969円まで1円以上急反発した。
9日	前週末の米5月雇用統計後に株高を受けてクロス円が上昇した流れを引き継ぎ、早朝に140.077円の高値を付けた。しかし欧州市場に入るとECBの利下げを見直す形でドイツの長期金利が低下し、米独金利差が拡大する中、ユーロ/ドル主導でユーロが下落。NY市場にかけて139.270円まで値を下げた。
12日	米国で発表された5月小売売上高と週次新規失業保険申請件数がいずれも予想より弱めの結果となったことからNYダウ平均が弱含む中、米オバマ大統領が「イラクでの軍事攻撃の可能性を排除しない」と発言すると株安が加速。リスク回避の動きが強まりユーロ/円は137.723円まで下落した。ただ、同時に米長期金利の低下とともにドル安が進み、ユーロは対ドルで上昇したため、ユーロ/円の下値は限られた。
16日	イラク情勢やウクライナ情勢への懸念から日経平均が15000円を割り込んで下落すると137.707円の安値を付けた。しかし、欧州市場に入り、一部報道で関係筋の話として「ECBは今後数ヶ月新たな政策手段を控える」と伝わると138円台へ切り返した。
19日	前日の米連邦公開市場委員会(FOMC)を受けて早期利上げ観測が後退したためドル売りが優勢となった。ユーロ/円はユーロ/ドルの上昇に連れて小幅に値を上げた。その後も、ノルウェー中銀が利上げ時期の予想を先送り(「15年夏まで」から「15年末まで」に)したためユーロ/クローナが急騰すると、対円でもユーロ高に振れた。
26日	米5月個人消費支出の結果が冴えなかった事や、米セントルイス連銀のブロード総裁が早期利上げを支持する発言を行ったためNYダウ平均が120ドル超下落すると一時138.00円を割り込んだ。

## EUR/JPY

## 日 経 平 均

OPEN	14777.51
HIGH	15442.67
LOW	14777.51
CLOSE	15162.10

## 独 D A X

OPEN	9986.86
HIGH	10050.98
LOW	9749.75
CLOSE	9833.07

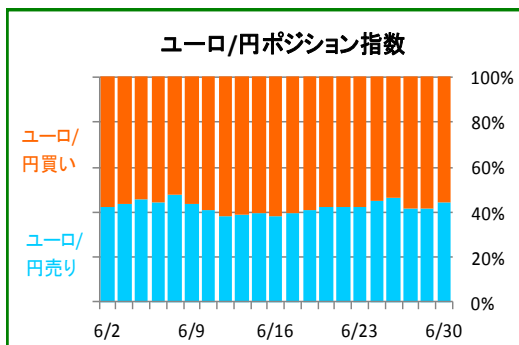
## 独 2 年 債 利 回

OPEN	0.0586%
HIGH	0.0633%
LOW	0.0196%
CLOSE	0.0228%

## 独 10 年 債 利 回

OPEN	1.3614%
HIGH	1.4656%
LOW	1.2390%
CLOSE	1.2431%

## 6 月 の ポジ シ ョ ン 動 向



## 今 月 の 注 目 ポ イ ン ト

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・欧州中銀金融政策発表(3日)
- ・5月独貿易収支(8日)
- ・日銀金融政策決定会合(14-15日)
- ・7月独ZEW景況感調査(15日)
- ・第2四半期中国GDP(16日)
- ・7月独IFO景況指数(25日)
- ・7月独消費者物価指数・速報(30日)
- ・イラク・ウクライナ情勢
- ・主要国株価、国際商品価格

## 今 月 の 見 通 し

欧州中銀(ECB)は、6月5日の理事会で緩和パッケージ(2ページ参照)を発表したが、ドラギ総裁はその後の会見で資産担保証券(ABS)の買入れ準備を強化しているとして、追加緩和の実施に含みを残した。今月3日の理事会での決定内容が注目されよう。もともと、6月理事会の数日後には、関係筋から追加緩和を否定するコメントが出るなど、相変わらずECBの政策遂行姿勢は一枚岩ではない様子が窺える。こうした中で、ECBが実際の行動を起こさず、ドラギ総裁の口先緩和に頼るようだとユーロ相場を押し下げる効果が剥落しかねない。ドイツの多額の貿易黒字などファンダメンタルズ面からのユーロ高要因は少なくないだけに、ECBの追加緩和観測が後退すればユーロ/円が上昇する事になるだろう。

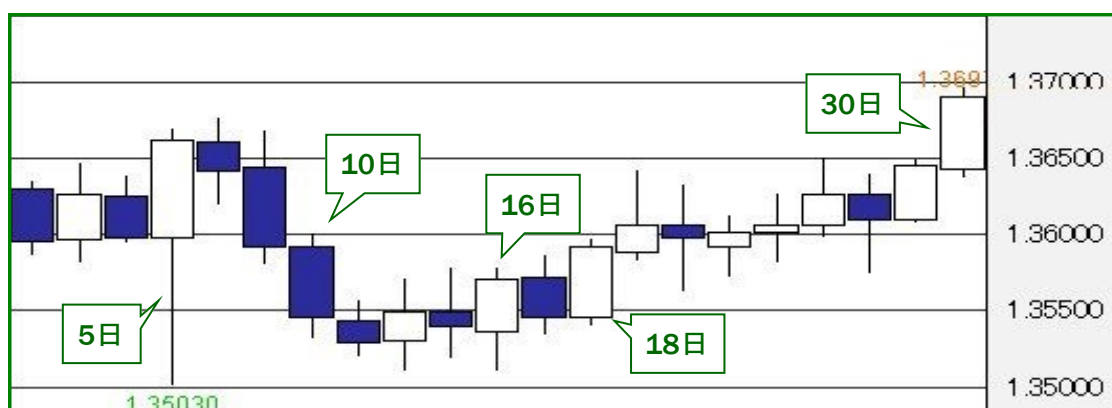
その他、7月のユーロ/円相場を見通す上では、主要国株価の動向も重要だ。6月後半は、ドル安と株高が同時進行するなどクロス円が上昇しやすい環境にあっただけに、7月もこうした流れが続くようなら140円台の定着もあり得るだろう。イラクやウクライナの情勢については、過度の懸念は無用と思われるが、突発的な戦闘激化などの際は一時的に株安・円高を引き起こす可能性もあるため注意が必要だろう。(神田)

(予想レンジ:137.000~142.000円)

## ユーロ/ドル 6月の推移

EUR/USD

6月のユーロ/ドル相場は1.35030～1.36974ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.4%の小幅な上昇(ユーロ高・ドル安)となった。5日の欧州中銀(ECB)理事会でマイナス金利を含む緩和パッケージが発表されると、1.35030ドルの安値を付けたものの、翌日の米5月雇用統計で1.3670ドル台まで反発。その後は、このレンジの中で方向感なく一進一退の展開となったが、6月末(半期決算末)の最終取引となった30日には、実需のフローに支えられて1.37ドル目前まで上昇した。ECBの緩和パッケージによるユーロ安と米国の早期利上げ観測が後退気味となった事によるドル安がせめぎあった格好で、はっきりとした方向感を感じられなかったが、少なくともマイナス金利にまで踏み込んだECBの追加緩和はユーロ/ドル相場では効果が乏しかった事になる。



## 四本値

OPEN	1.36304
HIGH	1.36974
LOW	1.35030
CLOSE	1.36919

**5日** ECBが主要政策金利であるリファイナンス金利を0.25%から0.15%へ引き下げると同時に、中銀預金金利(下限金利)を0.00%から-0.10%へ、上限貸出金利を0.75%から0.40%へそれぞれ引き下げた。リファイナンス金利を0.10%まで引き下げると見ていた市場は、当初ユーロ買いで反応したが、ECBが「一段の政策措置をこの後発表する」とアナウンスすると急速にユーロ売りが活発化。その後、ドラギ総裁が会見を行い「証券市場プログラム(SMP)の不胎化措置を停止」「目的を絞った長期リファイナンスオペ(LTRO)を決定」「超過準備にもマイナス金利を適用」「資産担保証券(ABS)購入に向けた準備作業を強化」などを明らかにすると1.35030ドルの安値まで下落した。ところが、売り一巡後は材料出尽くし感からユーロを買い戻す動きが強まり急反発した。

**10日** リーカネン・フィンランド中銀総裁(兼ECB理事)が「ECBには活用できる手段がまだ残っている」と発言し、追加緩和に含みを残す発言を行った事がきっかけとなり、ドイツの長期金利が低下。米独金利差拡大を背景にユーロ安・ドル高が進み、1.35333ドルまで下落した。

**16日** イラク情勢やウクライナ情勢への懸念から日経平均が15000円を割り込んで下落する中、ユーロ/円が安値に沈むと、ユーロ/ドルも1.35124ドルへと連れ安した。しかし、欧州市場に入り、一部報道で関係筋の話として「ECBは今後数カ月新たな政策手段を控える」と伝わると1.35791ドルへ切り返した。

**18日** 米公開市場委員会(FOMC)は量的緩和による資産購入規模の100億ドル減額を決定。同時に発表された声明では「労働市場の指標は概ね一段の改善を示した」などとした一方で、経済予測では15年の初回利上げを見込むメンバーが、前回の16人中13人から12人に減少した事が明らかとなった。また、今年の経済成長率予測(中心傾向)が2.1-2.3%(前回:2.8-3.0%)に引き下げられた一方で、今年末の失業率は6.0-6.1%(同:6.1-6.3%)へと改善方向に修正された。これらを受けてドルが乱高下する中、ユーロ/ドルは1.3590ドル台まで上昇するや否や1.3540ドル台へ下落するなど荒っぽい展開となった。ただ、その後、イエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長が会見を行い「経済下振れなら緩和策をより長期間維持する可能性」などと総じてハト派的な見解を示したため、ドル安が進む形でユーロ/ドルは再び1.3590ドル台へ上昇した。

**30日** 前営業日27日に、独6月消費者物価指数・速報が前月比+0.3%と予想(+0.2%)を上回った事から、ユーロ圏6月消費者物価指数・速報にも上ブレが見込まれる中でユーロ買いが優勢となった。実際に発表されたユーロ圏6月消費者物価指数・速報が予想通りの前年比+0.5%となったためやや伸び悩んだものの、その後、月末・四半期末の最終日のロンドンフィクシング(日本時間24時)に向けて実需のユーロ買い・ドル売りが持込まれると月初来高値となる1.36974ドルまで上昇が加速した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## EUR/USD

## NYダウ平均

OPEN	16716.85
HIGH	16978.02
LOW	16673.65
CLOSE	16826.60

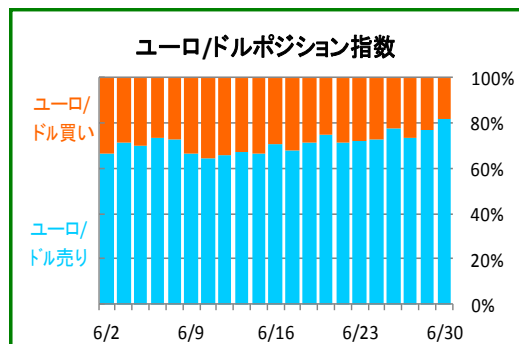
## 独10年債利回

OPEN	1.3614%
HIGH	1.4656%
LOW	1.2390%
CLOSE	1.2431%

## 米10年債利回

OPEN	2.4794%
HIGH	2.6566%
LOW	2.4750%
CLOSE	2.5304%

## 6月のポジション動向



## 今月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・欧州中銀金融政策発表(3日)
- ・6月米雇用統計(3日)
- ・7月独ZEW景況感調査(15日)
- ・6月米小売売上高(15日)
- ・第2四半期中国GDP(16日)
- ・6月米住宅着工件数(17日)
- ・7月独IFO景況指数(25日)
- ・独7月消費者物価指数・速報(30日)
- ・第2四半期米GDP・速報値(30日)
- ・米FOMC政策金利発表(30日)
- ・米長期金利
- ・主要国株価
- ・イラク・ウクライナ情勢

## 今月の見通し

6月は、欧州中銀(ECB)がマイナス金利を含む緩和パッケージを導入したにもかかわらず、ユーロはドルに対して上昇した。6月末に見られたユーロ需要が示すとおり、ユーロ圏(特にドイツ)の経常黒字や貿易黒字に由来するユーロ高圧力は無視できないものがあるという事だろう。7月はECBの追加緩和が見送られる公算のため、ユーロ高基調も続く可能性がある。もっとも、7月は実需のフローが半期決算末の6月ほど多くないと見られるため、ユーロの動き自体は緩慢なものとなる公算が大きい。したがって、7月のユーロ/ドルの方向性を左右するのは米ドルの動向という事になりそうだ。

米国の金融政策当局は、今秋にも量的緩和を終了させ、来年中の利上げを見据えているが、第1四半期の国内総生産(GDP)が想定以上に落ち込んだ事などから、早期利上げに対する市場の見方は揺らぎ始めている。7月に発表される米重要指標(雇用統計や小売売上高、第2四半期GDPなど)の結果を受けて早期利上げに対する市場の見方がどのように変化するかが焦点だろう。米早期利上げ観測の後退はドル安(ユーロ高)に繋がり、早期利上げ観測が高まればドル高(ユーロ安)に繋がりやすい。30日の米連邦公開市場委員会(FOMC)の声明も利上げ開始時期を探る上で重要な手掛かりとなる可能性がある。(神田)

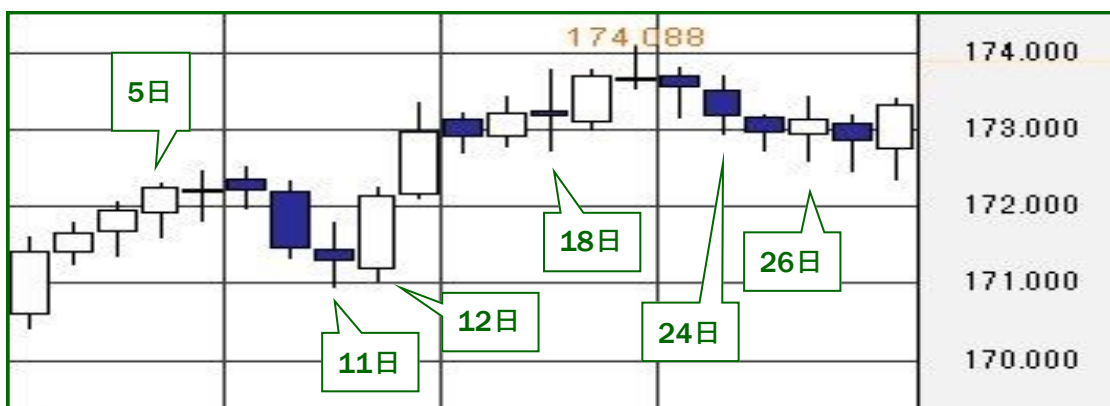
(予想レンジ: 1.34000~1.38500ドル)

## ポンド/円 6月の推移

GBP/JPY

6月のポンド/円相場は170.435～174.088円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.6%の上昇(ポンド高・円安)となった。

上旬は堅調だったドル/円相場の影響などもあってジリ高となった上、中盤のカーニー英中銀(BOE)総裁の発言や英金融政策委員会(MPC)議事録によって強まった早期利上げ観測が追い風となり、ポンド/円は20日には174.088円の高値を付けた。しかし、24日に行われたカーニーBOE総裁の議会証言からは12日の講演で見たようなタカ派的な姿勢は見受けられず、早期利上げ観測は減退。ポンド/円の上げ幅を縮小させる事となった。



## 四本値

OPEN	170.633
HIGH	174.088
LOW	170.435
CLOSE	173.322

5日	欧州中銀(ECB)が利下げ(政策金利0.25%→0.15%、中銀預金金利0.0%→マイナス0.10%、限界貸出金利0.75%→0.40%)を発表し、その後に「一段の追加措置をこの後に発表する」とした事でユーロ/ポンドでポンド高が進行すると、ポンド/円は一時172.30円台まで上昇。ただ、材料出尽くし感からユーロ/ポンドが反発すると、その後は伸び悩んだ。なお、BOEは金融政策を市場予想通り据え置いたため、この件は特に材料視されなかった。
11日	英5月雇用統計が失業率3.2%(市場予想:3.2%)、失業保険申請件数推移が2.74万件減(同:2.5万件減)、2-4月ILO失業率が6.6%(同:6.7%)と、概ね良好な結果だった事から、ポンド高が進行。ドル/円の下げに連れて一旦171.00円前後まで軟化する場面もあったが、米国市場に入って、ユーロ/ポンドが年初来安値を更新するなどユーロ安・ポンド高が加速すると、ポンド/円は下げ幅を縮小した。
12日	イラク北部の都市が過激派武装組織に相次いで制圧された事を受けてオバマ米大統領が「イラクでの軍事攻撃の可能性は排除しない」と述べた事からリスク・オフムードが広がると、ポンド/円は失速。しかし、カーニーBOE総裁がマンションハウスでの講演で「利上げは市場予想よりも早期に実現する可能性がある」と述べた事で早期利上げ観測が台頭すると、急反騰した。
18日	BOEのMPC議事録の発表前に、「利上げに賛成したメンバーがいたのでは」との思惑からポンドはジリジリと上昇。しかし、発表された議事録では全会一致で金融政策を据え置いた事が明らかになった事から、その後は一旦失速。もっとも、議事録において「市場が織り込む2014年の利上げの可能性が比較的低いことは『やや驚き』」とあったため、すぐに下げ止まった。
24日	カーニーBOE総裁が議会証言にて「利上げのタイミングはデータ次第になる」などと発言した事から、市場で広がっていた早期利上げ観測が後退し、ポンド/円は下落した。
26日	カーニーBOE総裁が金融安定報告で住宅ローン規制を発表したが、「住宅市場特有のリスクに対処するために、金融政策を活用する必要はない」とした事から早期利上げ期待は高まらなかった。ただ、これを受けて英国株が上昇すると英長期金利は上昇し、ポンド/円の追い風となった。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## GBP/JPY

## 日経平均

OPEN	14777.51
HIGH	15442.67
LOW	14777.51
CLOSE	15162.10

## FTSE100

OPEN	6844.51
HIGH	6878.96
LOW	6701.59
CLOSE	6743.94

## 英2年債利回

OPEN	0.6665%
HIGH	0.9198%
LOW	0.6593%
CLOSE	0.8634%

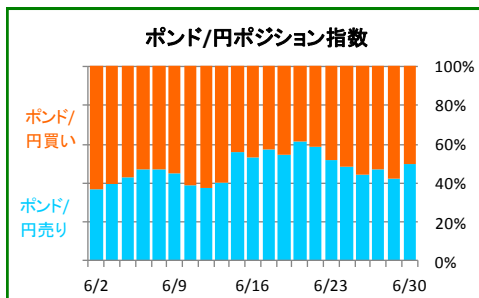
## 英10年債利

OPEN	2.5707%
HIGH	2.7862%
LOW	2.5664%
CLOSE	2.6684%

## 6月のポジション動向

## 今月の注目ポイント

## 月間指標カレンダー(外部リンク)



- ・BOE金融政策発表(10日)
- ・日銀金融政策決定会合(14-15日)
- ・英6月雇用統計(16日)
- ・BOE議事録(23日)
- ・英第2四半期GDP・速報値(25日)
- ・英利上げ時期を巡る要人発言
- ・イラク・ウクライナ情勢
- ・日本の追加緩和に関する要人発言

## 今月の見通し

英国では6月12日にカーニー英中銀(BOE)総裁が「利上げは市場予想よりも早期に実現する可能性がある」と述べたことや、18日に発表された英金融政策委員会(MPC)議事録によって早期利上げ期待が強まり、一時、市場は2014年11月の利上げを予想する動きが見られた。しかし、下旬の議会証言などによって、利上げ時期についての中心予想は一旦2015年初めまで後退している。7月は、この点についてカーニーBOE総裁がどのように考えているのか、引き続き要人やMPC議事録などから窺う事になるだろう。

もちろん、その他メンバーのスタンスや、英経済指標なども重要になってくる。特に、先月からデールMPC委員からホールデンBOE理事にメンバーがひとり入れ替わっている上、7月からさらにハト派寄りで知られるビーンBOE副総裁が退いて中立派と看做されているブロードベント委員がBOE副総裁へ就任、フォーブスMPC委員が入るなど、メンバーの入れ替わりも激しい。MPCのパワーバランスの変化にも注目したい。再び「利上げが年内に開始するのでは」との思惑が強まれば、ポンド/円には上昇圧力が掛かるだろう。6月高値174.088円を突破すれば、1月2日につけた年初来高値174.845円が視野に入ってくる。一方、下値については、BOEが利上げの必要性を否定するところまで行くような事がない限り限定的と見るが、イラク・ウクライナ情勢など地政学的リスクを受けてリスク回避ムードが急速に強まると、ポンド/円には大きな下押し圧力が掛かると考えられるため、英国内のみならず、外部環境にも気を配る必要がありそうだ。(石川)

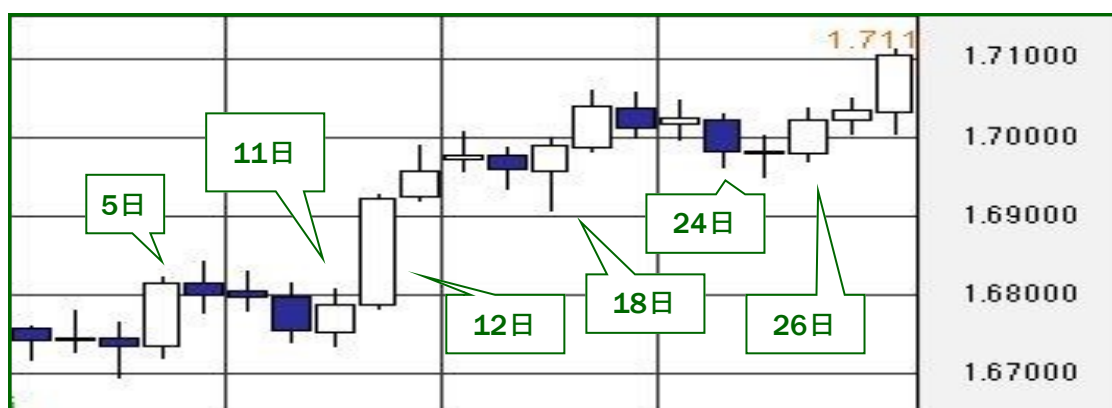
(予想レンジ: 170.000~176.000円)

## ポンド/ドル 6月の推移

GBP/USD

6月のポンド/ドル相場は1.66976～1.71138ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.1%の上昇(ポンド高・ドル安)となった。

この月は、米国の早期利上げ観測が減退する一方で、中旬に英国の早期利上げ観測が強まった事から、ポンド/ドルは堅調な推移となった。下旬にかけて、英国の早期利上げ観測も一旦落ち着いたため、伸び悩みを見せる場面が見られたが、30日に月末・期末を前にまとまった規模のドル売りが入り、これがポンド/ドルを2008年10月以来の高水準である1.71ドル台へ導く結果になった。



## 四本値

OPEN	1.67592
HIGH	1.71138
LOW	1.66976
CLOSE	1.71052

5日	欧州中銀(ECB)が利下げ(政策金利0.25%→0.15%、中銀預金金利0.0%→マイナス0.10%、限界貸出金利0.75%→0.40%)を発表し、その後に「一段の追加措置をこの後に発表する」とした事でユーロ/ポンドでポンド高が進行すると、ポンド/ドルは上昇。ただ、材料出尽くし感からユーロ/ポンドが反発すると、その後は伸び悩んだ。なお、英中銀(BOE)は金融政策を市場予想通り据え置いた事から、材料視は特にされなかった。
11日	英5月雇用統計が失業率3.2%(市場予想:3.2%)、失業保険申請件数推移が2.74万件減(同:2.5万件減)、2-4月ILO失業率が6.6%(同:6.7%)と、概ね良好な結果だった事から、ポンド高が進行。ドル/円の下げに連れて一旦軟化する場面もあったが、米国市場に入って、ユーロ/ポンドが年初来安値を更新するなどユーロ安・ポンド高が加速すると、ポンド/ドルは1.68092ドルまで上昇した。
12日	NY市場引け間際に、カーニーBOE総裁がマンションハウスでの講演で「利上げは市場予想よりも早期に実現する可能性がある」と述べた事で早期利上げ観測が台頭すると、急騰した。
18日	BOEの金融政策委員会(MPC)議事録の発表前に、「利上げに賛成したメンバーがいたのでは」との思惑からポンドはジリ高。しかし、議事録では全会一致で金融政策を据え置いた事が明らかになった事から、ポンドは一旦失速。もっとも、議事録において「市場が織り込む2014年の利上げの可能性が比較的低いことは『やや驚き』」とあった事からすぐに下げ止まった。その後、米連邦公開市場委員会(FOMC)声明が発表されたものの、目新しい内容はなかった事から、発表直後のポンドは乱高下。ただ、米連邦準備制度理事会(FRB)のイエレン議長も会見で「経済は持ち直しの過程、今後も改善が続く見通し」「最近の消費者物価指数データはやや高めだった」「失業率はFOMCが予想していたよりも早く低下した」などと発言したが、利上げの時期については「量的緩和終了から利上げ開始までの期間は決まっていない」とするに留めた事から米国の低金利政策長期化観測から米長期金利が低下し、ポンド/ドルを押し上げた。
24日	カーニーBOE総裁が議会証言にて「利上げのタイミングはデータ次第になる」などと発言した事から、市場で広がっていた早期利上げ観測が後退し、ポンドは下落。米5月新築住宅販売件数が50.4万件、6月消費者信頼感指数は85.2と予想(43.9万件、83.5)を上回った事を受けたドル買いも重石となった。
26日	カーニーBOE総裁が金融安定報告で住宅ローン規制を発表したが、「住宅市場特有のリスクに対処するために、金融政策を活用する必要はない」とした事から早期利上げ期待は高まらなかった。ただ、これを受けて英国株が上昇すると英長期金利は上昇し、ポンド/ドルの追い風となった。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。



## GBP/USD

## NYダウ平均

OPEN	16716.85
HIGH	16978.02
LOW	16673.65
CLOSE	16826.60

## 米10年債利回

OPEN	2.4794%
HIGH	2.6566%
LOW	2.4750%
CLOSE	2.5304%

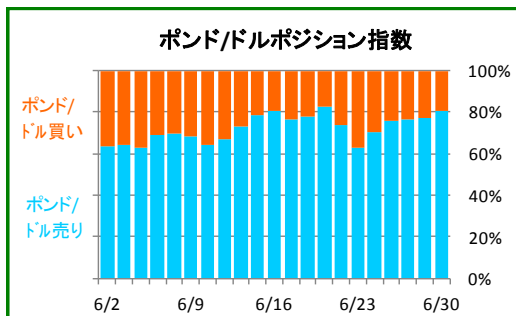
## 英10年債利回

OPEN	2.5707%
HIGH	2.7862%
LOW	2.5664%
CLOSE	2.6684%

## 6月のポジション動向

## 今月の注目ポイント

## 月間指標カレンダー(外部リンク)



- ・米6月雇用統計(3日)
- ・BOE金融政策発表(10日)
- ・英6月雇用統計(16日)
- ・BOE議事録(23日)
- ・英第2四半期GDP・速報値(25日)
- ・米第2四半期GDP・速報値(30日)
- ・米FOMC声明発表(30日)
- ・米利上げ時期を巡る要人発言
- ・英利上げ時期を巡る要人発言
- ・イラク・ウクライナ情勢
- ・米長期金利
- ・主要国株価

## 今月の見通し

米国については、ここ最近の米連邦準備制度理事会(FRB)のイエレン議長の「利上げ時期について示唆をしない」スタンスを見ると、市場予想よりもかなり良好な経済指標が続き、かつインフレ懸念も強まる、という事でもない限り、新たな思惑が生まれる可能性は低そうだ。一方、英国の方は、6月に態度が定まらなかったカーニーBOE総裁の発言が、引き続き市場の利上げ時期に関する思惑に作用し続けるだろう。さらに、先月に1名、今月に1名入れ替わっている英金融政策委員会(MPC)メンバーの動向にも注目したい。MPCでは多数決で金融政策を決定するため、大事なのはカーニー総裁のみの意見だけではない。英経済指標やMPC議事録など併せ、年内利上げ観測が再度強まれば、ポンド/ドルは一段と値を伸ばすものと考えられる。

ただし、地政学的リスクには要注意だ。ポンド/ドルは今年に入って堅調な推移が続いているため、リスク許容度が急激に縮小するような事態が起これば、一旦の失速は避けられないだろう。イラクやウクライナなどの地政学的リスクや、アルゼンチンのデフォルト問題など、世界中に散らばる火種に関する注意は怠らずにおきたい。なお、下げた場合は、一旦は60日移動平均線がサポートラインとして働きそうだ。(石川)

(予想レンジ: 1.67000~1.73000ドル)